
テンプレチートオリ主に強制的にさせられた元一般人のお話

ゼニア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テンプレチートオリ主に強制的にさせられた元一般人のお話

【Nコード】

N0830Y

【作者名】

ゼニア

【あらすじ】

銀髪オッドアイで尚且つチート能力を強制的に持たされて転生させられた元一般人の物語。

この小説は神様転生、チート、オリ主の要素が出て来ます。

苦手な方は回れ右をして回れ左をしてください。

プロローグ

「.....ん？」

何もなく、見渡す限り真っ白な空間で一人の男が目覚めます。

「あれ？　ここどこだ？」

男はキョロキョロと当たりを見回していると

「ふむ、ようやく気がついたか.....」

そんな言葉と共に白いローブを着た老人が現れた。

.....side：謎の男

「あんた誰だよ？」

俺は突然現れた老人に問いかける。

これ夢なのかなあ.....

「ワシは最高神じゃ」

ん？西光 進？

「ああ、全国水平社宣言の」

「それは西光 万吉じゃ、ワシは最高神じゃ、言わば全ての神の頂点に立つとる者じゃな」

目の前の老人はそんな事を言う。

「くつ、可哀想に……この爺ちゃん、ボケちゃってるのね……！」

「いや、ボケとらんし、人を見た目と言動で判断すんなし」

何だ、正気なのか

「え？ てことはつまりガチなの？」

「うん、そう、ガチもガチ、大ガチじゃよ」

そんな馬鹿な……！

「な、なななな何で神様がいらっしやるんでございやすでゲスカ！？」

「落ち着け、驚き過ぎて言葉が変じゃ」

ま、まあまあ、と、取り敢えず落ち着こう。

すーはー、すーはー。

よし。

「落ちついたな？」

では話そう、お主がここにいる理由などをな」

- - - - -

神様説明中・・・

- - - - -

「つまり俺は死んだ、と」

「うむ、そうじゃ、下級神が誤ってお主を殺しての、偶々ワシが下界を覗いていたから良かったものの、お主を殺した下級神はバレていないと思ったのか、誤って殺した事を隠蔽しようとしておったから」

ひでえ、神様が殺しを隠蔽とか……

「じゃからその神には電気アンマ8時間の刑にしておいた」

「地味に辛い」

「ちなみにその下級神、女神ね」

らめええええ！？

「正直その女神を見に行きたいが、我慢して、結局俺はどうなるの？」

「こちらのミスじゃからな、お主には転生してもらっぞい」

おおっ！？ 来た、転生！

「異論は無さそうじゃな、では今からワシが言う条件と世界をどれか一つ選んでくれ」

1・子供魔法先生がいる世界へ行く、容姿は銀髪オッドアイ＋チート能力。

2・ゾンビで溢れかえった世界の日本に転生する、容姿は銀髪オッドアイ＋チート能力。

3・女性しか乗れない兵器がある世界に転生する、容姿は銀髪オッドアイ＋チート能力。

4・何の不思議な事もない世界、かと思いきや悪の秘密結社とかいる世界に転生する、容姿は銀髪オッドアイ＋チート能力

5・本気で何もない平凡な世界に転生する、容姿は銀髪オッドアイ。

「はっはっはっ、おいおいおいおい」

銀髪オッドアイでチート能力で。

「どこのテンプレチートオリ主だよ！？」

「気にいらんの?」

「気にいらんわ!？」

せめて銀髪オッドアイは止めて!？」

銀髪オッドアイとかいや過ぎるわ!

「残念じゃが無理じゃ」

何で!？」

「こんなテンプレチートオリ主になるならこのまま死んだ方がいいよ!」

「どうしても嫌なのかの?」

「やだよ!」

断固拒否する!

「しかたないの……」

諦めてくれたのかな?

「なら、無理矢理じゃああああ!!!!!」

じいさんがそう叫んだ瞬間、足下に穴が開き、落ちた、俺が。

「まさかの強制いいいいいい！！？」
「こんのクソジイいいいいいい！！！！」
「……………」

第1話 転生

どうも、皆さん。

俺の名前は『如月きさらぎ 煉夜れんや』

え？ 誰って？

プロローグにいた謎の男だよ。

あのクソジジイに強制的に転生させられて、七年ほど立っています。
キングクリムゾンだが、赤ん坊時代の事を話してもしようがないし
ね。

それはそうと、あの駄神ガチで銀髪オッドアイに転生させてくれや
がりました。

信じられないだろ？ 日本人なんだぜ……俺。

ちなみに転生直後の回想……

- - - - -

『無事転生出来たみたいじゃの』

『おい、クソジジイ！

ふざけんなよ！？』

銀髪オッドアイなんかにしやがって！

どうせ銀髪オッドアイならラグナに憑依転生とかしたかったわ！

『あれあれ？ 最高神のワシにそんな事いっていいのかの？ くだすよ？ 天罰』

『やれるものならやってみろよ』

『運がよかったの、MPが足りないみたいじゃ』

『死ねよ』

ギャグってんじゃないやねえよ……

『まあまあ、そう怒るな、転生してしまったモノは仕方ないじゃろ』

アンタが強制的に転生させたんじゃないやねえか

『四の五の言うでない、では今からお主の能力を教えよう』

えらく唐突だな。

しかし能力か……まあチート能力なんだろうね。

『お主の能力は以下の通りじゃ』

1・界王拳

2・サイヤ人並みの気

3・SSS級魔力

4・ニコポ

5・ナデポ

『あ。あと、お主がおる世界はリリカルでマジカルな魔法少女の世界じゃからな』

『おかしいだろ!？

何だよ、界王拳って!？

公式チート能力持つてくんなよ!？

それにサイヤ人並みの気ってどの位だよ!？

いや、それ以前にニコポとナデポはいらねえ!』

『ほっほっほ、安心せい、界王拳は今のお主でも5倍まで耐えられるからの』

『そついつ事を言ってんじゃ……』

『じゃ、そついつ事で』

そついい、じいさんの言葉は途切れた。

『え、ちょ……』

マジで？』

- - - - -

回想終了。

正直、SSS級魔力だけでよかった……

そして、ニコポとナデポは本当にいない……

てかあまりにも能力が濃かったからスルーだったが、リリカルなのはの世界ってのもおかしいよね。

確かさ、あのじいさんが選べって言ってた世界ってさ

1はネギま

2はおそらく学園黙示録

3はインフィニット・ストラトス

4は秘密結社とか言ってたから仮面ライダーとかかな

5は普通の世界

……リリカルなのはは選択肢になかったじゃん……

適當すぎだろ、じいさん……

まあ、もう半ば諦めてるけど。

あれだな唯一の救いは俺の両親が銀髪オッドアイっていう明かに異常な俺を気味悪がったりせずちゃんと育ててくれてる事だな。

ありがとう、母さん、父さん。

そして、ニコポとかふざけた能力のせいで笑えなくてすみません。

……

さて、能力の事だが。

まず界王拳、赤ん坊の時から5倍とか出来る時点で薄々気づいてたけど、成長に連れてさらに倍に出来るようになった。

現在8倍まで出来るようだ。

これ、悟空みたいな修行したらどうなるんだろうね。

次にサイヤ人並みの気つてのはどうやら、悟空とかベジータ並みの気を持つてるようだ。

しかし、サイヤ人じゃないから気を100%フルには使えないみたい。

いや、正直クリリン、いやヤムチャ並みの気でもかなりチートだけどね？

夢のかめはめ波が撃てるのかな……

次にSSS級魔力、これがある意味普通。

よくある感じのチート能力だね

取り敢えずデバイスとか無いわけだから使い方がよく分からんがりンカーコアがあるのは感じられた。

んで最後はニコポ、ナデポと……

何でこんなハーレム作るぜ！みたいな最低系の能力なんだろ。

ニコポのせいで俺、アレだよ？ 無口無表情で何時も隅っこで本呼

んでる長門さんみたいポジションになってるんだよ？

唐突なアクシデントで笑いそうになった時とかマジ困る、必死で顔隠さんとヤバいからな……

一回ニコポを偶々いた猫さんにやってみた事があるんだが、凄いなつかれた。

どんなに引き離そうとついてくるから、界王拳使って逃げたのに俺の事追いかけて来たからな。

お陰で今は我が家の家族です。

ナデポは言わずもがな、ニコポが猫に対してではあるが威力が絶大だったからナデポとか出来ねえ、てか初対面の人を撫でようとかしたら変態だよ。

この二つの能力は正直どうにかせんとヤバい。

将来的にもしも子供が出来たりしたら、俺自分の子供に笑いかけたり撫でたり出来ねえじゃん……

親に本気で惚れる子供とか薄い本だけでいいよ。

しかも厄介なのが男に対しても効果あるってのがダメだよなあ……

何とかしないと、ウホッな展開に……

止めよう……
想像したら気分が……

ま、まあまあ、うん、とにかく、こんな感じで俺の第二の人生が始まったのでした。

主人公紹介

【如月^{きさらぎ} 煉夜^{れんや}】

神様に強制的に銀髪オッドアイのテンプレチートオリ主にさせられた元一般人。

鏡をみるたびに毎回orz↑こつなる。

だがかなりのイケメンではある。

最近、名前もオリ主っぽい気がするんだけど……と更にネガティブっている。

能力は界王拳、馬鹿みたいに高い気、今から数年後のなのはさん並みの魔力、ニコポ、ナデポ。

界王拳は最初から使える。

気は練習中、しかし、界王拳が使えるためにすぐに扱えるかもしれない。

魔力は扱い方が分からない、正直気だけでもいいんじゃないかな？と思っている。

ニコポのせいで社交性皆無の男の子になってしまった。

しかも、銀髪オツドアイというのもあってか友達がいらない。

しかし、内心でははっちゃけ倒したくて仕方がない。

人がいる前で笑えない分、家の自室で思う存分笑っている。

能力を完全に使いこなせるように頑張っているが、ニコポのせいで原作に介入するかどうか悩んでいる。

「これも全てニコポって奴の仕業なんだ」

「なんだって、それは本当かい？」

第2話　なのはちゃんはいいい子だねえ

やあ、みんな、如月だよ

目と目が逢うてゝ

ごめん、何でもない。

只今俺は

「ねえねえ、如月くん、なに読んでるの？」

原作キャラに絡まれています。

あ、ちなみに今学校ね。

因果的な何かがあるのか俺は私立聖祥大附属小学校に入学した。

そつ、今俺に絡んでる原作キャラとは、『高町なのは』

主人公だった。

何故かは分からないが、入学してから段々孤立して誰も俺に話しかけて来なくなつたのに、なのはさんだけが度々俺に話しかけてくるのです。

何故だ。

ニコリとしたことないからニコポの呪いを受けた訳じゃないはずなのに……

「あっち行け」

俺はなのはさんに冷たく言う。

その言葉でなのはさんは悲しそうな顔をする。

ごめんねええええ！！！！

こんな事言つて本当マジごめんねえええ！！！！

でも孤立した俺に話しかけてくれる優しさに顔がニヤけそうになるからあああ！！

正直ニコポってどういう笑い方でポツてなるのかわからんからニヤリとも出来ねえんだよ！

「ちょっとあんた！　なのはがせっかく話しかけてるのに何でそんな事言うのよ！」

『アリサ・バニングス』さん怒鳴りながら登場。

アリサさんの怒りはごもつともです、俺も俺自身に怒鳴りつけたい、いやむしろあのジジイを怒鳴りつけたい。

「だ、ダメだよアリサちゃん、私は気にしてないから、ね？　行く！」

と、なのはさんはアリサさんの腕を引きながら行ってしまいました。

「ちょ、なのは！？　まだ話が……」

ごめんなさい、心の中で土下座します。
いやむしろ土下寝します。

ダメだと言っならヤムチャ寝します。

爆発してから。

……

「ちょっとなのは、どうして止めるのよー！」

アリサがなのはに問う。

「アリサちゃん、落ち着いて」

怒っているアリサを『月村　すずか』がなだめる。

「大丈夫よ、すずか、私は常に落ち着いてるわ」

アリサの言葉に「そうかなあ……？」と疑問に思うすずかだが口には出さない。

「ていうか、なのははどうしてアイツに構うの？　ほとんど喋らないし、何時も無表情で本読んでるし、はつきり言って根暗よ？」

ズバツと言うアリサ、本人が聞いていたら心の中で泣いてそうだ。

「……如月くんはね、何時も寂しそうな目をしてるの」

なのはが喋り出す。

「男の子達が漫画やアニメの話をしてる時に話に加わりたそうにしているし、お弁当食べてる時も誰かと一緒に食べたそうにしているの」

——その時の煉夜。——

【少年達の話】

（うおおおお！　あの少年達、ドラゴンボールの話してるじゃねえかよ！

この世界にもドラゴンボールあるのかよ！？

やべえ、話に加わりてえ……！
ネタバレしてえ……！

【昼食】

（寂しい。）

俺以外みんな、グループ作ってんのに俺だけポツリと……

くっ、給食だったら強制班になるのに……

まあ、班になっても俺に話かけてくる奴はいないだろうけど……

やべえ、目から汁が出そうだ）

「それで、お友達になりたいな、って」

「話はわかったけど、あんたよく見てるわね
まさかアイツの事……」

「にやつ！？　ち、違うよー！」

アリスの妙な勘違いに手をパタパタと振り否定するのは。

「まあ、取り敢えずそういう事なら私達も手伝っわ、ねっ、すずか」

「うん、私達も頑張る」

「二人ともありがとうー！」

.....
「っ！？」 何か俺の知らない所で変なことになってそうな
心配が.....！
なるほど、コレが氣を感じると言うことか「

違います。

第3話 ……あるえ？（前書き）

次の話からキングダムゾンシてると思っています。

第3話 ……あるえ？

「如月くん、一緒にお弁当食べよ！」

「屋上に行くから来なさい！」

「みんなで食べた方が美味しいよ」

上から、なのはさん、アリサさん、すずかさん。

あるえー？ 何でこんな事になってんの？

何で昨日より好感度上がってんの？

まさか、昨日、界王拳の練習で調子に乗って9倍にしたからこんな事に……？

いや、絶対ないわ。

てか筋肉痛半端ないッス。

補正的なものがあるからこの程度ですんでるんだよね。

何かごめんね、悟空。

それはそうと、この状況だね。

正直嬉しいけど

「一人で食べるからいい」

一緒に弁当何て食ったら幸せ過ぎてニヤけちまっよ……

「そんな事言わないで行こ！　ね？」

なのはさんがずっと顔を近づけてくる。

らめえええ！　そんな期待の籠もった目でみないで！

「い、いいってるだろ……」

お、俺は一人で食べるから……」

……………〔屋上〕

「いただきますっ」

嬉しそうにお弁当を食べ始めるのはさん。

どうしてこうなった？

今日のなのはさん何時も以上に食い下がって来て、それでも断つて俺に業を煮やしたのか、アリサさんに首根っこ掴まれて屋上に強制的に連れてこられました。

何か強制つてのに縁があるのかな、俺。

「全く、アンタのせいで、時間ギリギリになるじゃない」

「まあまあ、アリサちゃん」

……………さあて、ここまで来ちまった以上、もう逃げられないぜ？俺が。

本気出して、無表情にならねばならん……

だけど、嬉しくて、自然と笑みが出そうだよおっかさん……！

「どうしたの？ 如月くん。
変な顔して……」

はっ！？　なのはさんに見られた！

ニヤけそうな顔を必死に隠して無表情にしようとしてる顔がっ！

ニヤけと無表情の中間みたいな顔って凄い変だよな。

「い、いや、何でもない」

こうなれば、弁当を食うことに集中して、周りを気にかけない事にしよう。

「ねえねえ、如月くん」

「……………」（パクパク）

「如月くん？」

「……………」（むしゃむしゃ）

「あう……………」

ドゴッ！

「うぶっ！？」

「無視してんじゃないわよ！」

な、なんだ！？ 何が起こった！？

弁当に集中してたら横腹に衝撃が走った……

周りを見ると、ちょっと涙目なのはさんと毛が逆立ちそうな勢いでキレてるアリサさん、そしてアリサさんをなだめるすずかさん。

………なんか俺が思い描く事と全く違う事が起こりすぎじゃね？

「やっぱり、迷惑だったかな……
如月くん」

不安げな表情で聞いてくるのはさん。

ここは、迷惑だと言った方が俺に関わらなくなるんじゃないだろうか
………

ニコポと言う厄介な物を何とかせんと危険だもんなあ………

やはり、ここは……

「め、迷惑」

「っ！？」

「じゃない」

あれ？

あ、ありのまま今起こった事を話すぜ！

『迷惑で止めようと思ったたら「じゃない」をつけてしまっていた…
…』

何を言っているかわからねーと思うが俺も何が起こったのかわかない…

頭がどうにかなりそうだった…

もっとも恐ろしいモノの片鱗を味わったぜ…

いや、さ。

あんな泣きそう顔見て、冷たく言い放つ事なんて出来なかった…

——ちなみに。——

【頭がどうにかなりそうだった】

アリサの殺されそうなくらいの鋭い眼光を向けられて。

【もっとも恐ろしいモノの片鱗】

すずかの黒い笑み。

「ほんと？」

「ほ、本当」

ヤバイ、ヤバイ。

なのはさんの涙目上目使いが可愛いすぎて世界がヤバイ。

「じゃあ、お友達になってくれる？」

「うん、なる」

……………。

あ、ありのまま今起こった事を（ry

なのはさんは魔性の女だったようです。

なのはさんの言う事は何でも聞いてあげたくなくなってしまっ……………！

友達承認しちゃったよ！？

「本当！？」

パアツと表情が明るくなるなのはさん。

ふ、ふふ…………

負けたよ…………

きつとコレから無表情を貫き通してストレスがたまる生活が開始さ

れるのだろっ……

それでもいいかなって自分がいて怖い。

第4話 瞬間移動

なのはさん達と友達になってから結構月日が立ちました。

俺、三年生。

原作開始まで秒読みだねっ！

そして、誰でもいいから俺をほめて！

今なお、無表情を貫き通している、俺をほめて！！

いやぁ、友達になった日から頻繁に四人でつるんでるだけどき、そろそろ限界。

何時も無表情な俺を笑わそうって変な企画が出てきた時はもうゴールしてもいいよね、みたいな感じだった。

俺に忍耐力が結構あつた事に驚きですよ。

あ、ちなみに界王拳が10倍まで耐えられるようになった。

成長するだけで倍数が增えるって……

何か本当ごめん、悟空。

キンコーンカーンコーン」

おっと、学校終了のチャイムがなったな。

さて、じゃ、帰

「レンヤ君、一緒に帰ろ！」

ろうとしたらなのはさんに捕まったでござる。

ちなみになのはさんは結構前から俺の事を『如月くん』から『レンヤくん』に呼び方がグレードアップしています

そして、なのはさんの後ろにはアリサさんとすすかさんという何時ものメンバー

しかし、今日は

「用事があるから一緒に帰れない」

ので一人で下校します。

「あ、そうなんだ」

ごめんね、なのはさん。

来るべき原作開始に備えて、修行するよ。

.....
と、言うわけで来ました。

人気の無さそうな山に。

とりあえず、アレだ、原作開始に備えて、なのはさんの砲撃に対抗できる攻撃を編み出そう。

まあ、対抗するといってもなのはさんと敵対するわけじゃないけど。

ていうか、あの砲撃に対抗するにはピッタリの技あるよね。

かめはめ波だよね。

オリジナリティなくてごめんなちい

ぶっちゃけるとここ数年、気の練習してこれは誰の気かっていうのは分かるようになったりはしたんだけど、気の放出をした事はないんだよね。

まあ、とにかく一度やってみる。

「よし……」

か、め、は、め」

「波っ！！」

ポヒュウ……

「何か出た」

スッゴいシケてたけど、かめはめ波できたな……

うん、取り敢えず出来たって事は気の放出の仕方を色々ためせば、かめはめ波出せるはず！

「かめはめ、波っ！」

ボウ！

「かゝめゝはゝめゝ、波あ！」

ドオン！

「かああめえええ（若本風に）」

バチッバチバチ……！

「はああめえええ（若本風に）」

ビリビリビリビリ……

「ぶるああああー!!」

ズドオオオオ!!……!!

「どういうことなの」

漫画みたいにしっかりしたかめはめ波が出たけど何で若本風で一番ちゃんとしたのが出たんだ……？

「普通に出せるようにならんと、セルのかめはめ波みたいになってしまいそうだ……」

さて、と。

逃げよう。

空に撃ったとは言え光の柱が昇って行ったのを見た人が来るかもしれないし。

よし、ここは瞬間移動で……

「……………」

ピッ

額に人差し指と中指を当てる。

悟空の瞬間移動ポーズだな。

「これは母さんの気だな………」

ピシュン！

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「って出来たらいいのにねえ」

瞬間移動は流石にまだ無理だぜ。

というか母さんは俺がこんな事出来るのを知らないから、母さんの所に瞬間移動とかしないわ

さて、ふざけてないで移動しようか……

第5話 原作開始

《助けて》

!?

これは……

ユーノくんとうとう来たか……

「今、何か聞こえなかった？」

なのはさんが言う。

ちなみに今日は一緒に下校中でした。

「何か？」

すずかさんが首を傾げる。

「何か声みたいな……」

「別に……」

「『さようなら、天さん、どうか死なないで』くらいしか……」

「それ、聞こえたの!？」

「ていうか、あんたが冗談言っただの初めて聞いたんだけど……」

そっぴゃ、いつも冗談とかネタは心の中で言っただけだ……

《助けて!》

「!?! やっぱ聞こえる!」

そう言っただのはさんは駆けていきました。

とうとう、原作開始かあ……

どうしよう、俺、舞空術昨日覚えたばかり何だけど……

いや、別にいいか。

なのはさんを追いかけてフェレットっぽい、生き物を発見。

「怪我してる……」

「取り敢えず獣医さんに見せよう」

「う、うん!」

.....

で、結局ユーノくんの怪我はそんなに大した事もなく、獣医さんに預けてみんな家に帰りました、と。

今日の夜かなのはさんが魔法少女になるのは……

んー、まあ、うん。

取り敢えず、再びユーノくんの声が聞こえるまで寝てようかな……

………
《聞こえますか？僕の声が、聞こえますか？》

再び、声が響く。

「昼間の声と同じ声……」
なのはが声に反応する。

《聞いてください
僕の声が聞こえるあなた、お願いです！
僕に少しだけ力を貸してください！》

「あの子が喋ってるの？」

そして、なのはは昼間助けたフェレットの下へと行くのだった。

【その頃の如月くん】

《聞こえますか？僕の声が、聞こえますか？》

「ううん……ブルータス、お前もか……ムニャムニャ」

見事に夢の中だった。

しかも変な夢を見ている。

《聞いてください

僕の声が聞こえるあなた、お願いです！
僕に少しだけ力を貸してください！》

「ん……オラに、元、気を……分けて、くれえ……」
今度は元気玉を作っているのだろうか。

そして、そのまま朝を迎えるのだった。

- - - - -

チュン、チュンチュン！

「小鳥のさえずりが朝だと知らせる……」

ふう……

普通に寝過ごしたぜ

まあ、いいか。

何とかなるでしょ。

取り敢えず、学校へ行こうか。

………

学校へ行くと、なのはさんがフェレットを飼うことにしたという話を聞いた。

なのはさんは無事、魔法少女リリカルなのはにランクアップしたようです。

授業中なのはさんきつとユーノくんと念話で話てるんだろうなあ、とか思いながら、1日は過ぎていきました。

・

・

・

で。

「それを渡して下さい!」

こうなると。

どうして、こうなったんだろう……

えーと、確か……

学校が終わって、いつものようにもはや当たり前のような感じで皆と下校して、家に帰り、ブルータス（ニコポ被害にあった猫、メス1話参照）が外でニャーニャー言ってるから何かと思って見てみたら

くわえてた。

何をつて？

宝石種。

通称ジュエルSEED。

何か違う気がするがまあいいだろう。

いや、ビビったね、ブルータス（猫）がまさかジュエルシードくわえてるとかね。

慌てて取り上げたよ

ジュエルシードが発動しちまったらヤバいからね

まあ、ブルータスは願いが無いのか知らんが発動しなくて良かった。

んで、もし発動してもいかなから急いでこの間、かめはめ波の練習をした山に来た。

そしたらね、みんな大好き『フェイト・テストロッサ』さんが現れました。

アルフさんを連れて。

正直ジュエルシードはフラグかと思ったんだが、ガチだった。

どうしよう……

初めて会う魔法少女がフェイトさんとか想定外だった……

第6話　なんかよく分からない内に初戦闘（前書き）

私「如月くんのオッドアイって何色と何色なの？」

煉夜「ん？　緑色と紫色

紫色とか……ラムダでもいるんじゃないのって感じだよね……」

第6話　なんかよく分からない内に初戦闘

「これは危険な物だぞ？　分かっているのか？」

フェイトさんに言ってみる。

「……………」

「いいから渡しな！」

フェイトさんにだんまり決め込まれました。

お兄さん泣きそう。

あ、同い年か。

アルフさんがグルルルと唸ります。

はつきり言って怖いです。

これを危険な物とか言わなければ一般人として接してくれてたかもしれないね、失敗した（・ω・）

「た………」

「？」

「タツカラプト・ポッポルンガ・プピリット・パロ！！」

「は？ あんた、何言ってる……」

俺も一体何を言っているのk

ビリビリビリビリ！！

「な！？」

いきなり俺が持っていたジュエルシードが発光しながら震えだす。

何だ？何だ！？

俺は慌ててジュエルシードを放り投げる。

ピシャン！！ ゴロゴロゴロ……

何かいきなり空が暗くなって雷とか鳴り出したんだが。

バシユウウウ！！

そして、ジュエルシードから光が昇り……

《私を呼ぶ者は誰だ……？》

何か出てきた。

「な、なんだいコレは！？」

あ、あんた何したのさ！？」

「ジュエルシードは実はナメック星のドラゴンボールだったって新
たな説が生まれたな」

慌てるアルフさんに言う俺。

まさか、ナメックの合い言葉でジュエルシードからポルンガ出てく
るとか完全に予想外だわ、しかも一個だけで出て来るとかドラゴン
ボール涙目。

まあ、ポルンガに似てるの顔だけだな。

動体とか龍ってか竜だし。

足あるし。

そして、俺はテンパリ過ぎて逆に冷静になってるし。

ヤバイ、俺の余計な一言でどんどん混沌になっていく……！

《さあ、願いを言え》

え、願い叶えてくれるの！？

「ね、願い？」

フェイトさんが放心した感じで言う。

そうだよね、いきなりこんなん出て来たら誰でも驚くよね。

だが、願いを叶えてくれるなら好都合だ。

今こそ俺の願いを……！

「俺のニコポ、ナデポをどうにかしてくれ！」

本当に願いが叶うなら俺は外で存分に笑える！

《それが願いか……

いいだろう、叶えてやろう……ただし》

ん？　ただし？

《私を倒す事が出来たらな！！》

「どついうことだぜ」

.....

よく分からない内に戦闘が開始し、10分くらいたちました。

《ちょこまかと！！》

ポルンガ（仮）の口から火球が放たれます。

「界王拳3倍！！」

それを界王拳の倍率を上げてかわします。

実はさっきからこんな感じで逃げ回ってます。

え？　だらしねえな？

はっはっはっ、よく考えてくれよ、確かに界王拳とか気とか扱えるけどさ、これまで普通の小学生だったんだぜ？

そんな奴が戦闘訓練とかすっ飛ばしていきなり実戦出来ると思う？

まあ、そんな事言っただけでは何も始まらないから、覚悟決めようか。

あ、ちなみにフェイトさん達は放心してるフェイトさんをアルフさんが人型にトランスフォームして抱えてどっかいきました。

丸投げとか。

《ぬん！》

ポルンガ（仮）は尻尾を振るい、俺に迫る。

「4倍！！」

それを確実に物理法則を無視した動きでかわし、ポルンガ（仮）の背後に回る。

界王拳って色々凄いやね。

「くらえ！ 完全に界王拳頼りの蹴り！！ 8倍！！」

《ぬっ！？ グオオオオ！？》

ズドオオオオン……！！

いやあ、スッゴい吹っ飛んで行ったよ。

界王拳スゲエ。

《おのれ、こしゃくな！》

あれで決まるとは思ってはないけど、そこまでダメージはなかった
っぽい。

ならばアレで決める！！

俺は両手を右腹辺りに持って行き気を溜める。

「か、め、は、め……」

俺の構えを見て、ポルンガ（仮）が身構える。

「波っ！！　とても思ってたか！！」

かめはめ波を撃たずにポルンガ（仮）の眼前へとかつ飛び拳を振りかぶる。

《ふははは！！　飛んで火にいる夏の虫だ！！》

ポルンガ（仮）は俺めがけ火球を放つ。

俺は迫り来る火球にぶち当たった……りはせず、火球は俺をすり抜けどこかに飛んで行った

《何！？》

「残像だ」

ポルンガ（仮）の真横に現れ

「波あああ！！」

先ほど溜めたいた、かめはめ波を放った。

……
うーん。

能力チートだけかと思ったら、思いの他ボディもチートだったっぽ

い、残像拳出来るとかマジ胸熱。

《よくもやってくれたな……》

さて、このポルンガ（仮）はどうしようかな……

8倍界王拳かめはめ波は大分効いたみたいで地面に倒れてるんだが

……

「勝った……よな？」

本当に願いを叶えてくれるのか？」

《ああ……

私に勝ったのだ、願いは叶えてやろう》

マジか、マジなのか……！

「じゃ、じゃあ、さっきも言ったように、俺のニコポとナデポをどうにかしてくれー！」

《………》

わくわく

《………》

ドキドキ

《……………ム》

な、何だ？

もう願い叶った？

《残念だがその願いは神の力を大きく超えている。
叶える事は不可能だ》

「なん……………だと？」

そん、な……………

ば、バカな……………

はっ！？ そうか……………

このニコポ、ナデポを与えてくれやがったあのじいさん……………

最高神って言ってたよな……………

つまり、このポルンガ（仮）の言っている神が下級神だろうが中級神だろうが上級神だろうが、そのさらに上に行く最高神の力を超えない限りジュエルシードで願いは叶わないって事？

くそお……半端に頂点立やがって……

何が最高だよ再婚しろコラああああ！！

ふう、ちょっと落ちつこうか……

《別の願いにするか？》

「保留って出来る？」

他の願いが決まった時にまた喚びたいんだが」

《いいだろう……》

では、さらばだ！》

そう言つて、ポルンガ（仮）は光を発し、収まった時には封印状態になったジュエルシードに戻っていた。

残念だが……

まあ、何とかなるさ！

うん、多分！！

最近、無表情にもちよつと慣れてきてるしね！

大丈夫、大丈夫

ガサガサっ！！

ふおう！？

な、何だ？

動物k

「レンヤ、くん……？」

「な、なのは……さん？」

なのはさん登場おお！？

え、まさか見られてた？

い、いやそんな事は……

「ごめんね、レンヤくん
ずっと見てたの……」

さっきの……何？」

＼（＾Ｏ＾）／

界王拳（その他諸々）バレた！

第7話　オハナシ（前書き）

例えばさ、もう自分（如月くん）の事を好きな子にはニコポ、ナデポは効きませんみたいなのはどうだろう。

第7話 オハナシ

- 数分前 -

コロコロコロコロ……!!

「ふええ！？ な、なにになに！？ 何でいきなり暗く……！」
も、もしかして……」

「なのは！ ジュエルシードだ!!」

いきなり暗くなった空に驚くなのはにユーノが叫ぶ。

「や、やっぱり……！」
行かないや!」

なのははジュエルシードの下へと走りだしたのだった。

……
「すぐそこだよ、なのは!」

『~~~~~!!』

『~~~~~!!』

ジュエルシードに近づくとつれ、物音や喋り声が聞こえてくる。

「誰がいる……？」

なのはは走るのを止め、ゆっくりと近付き物音の方を見る。

《ぬん!!》

『4倍!!』

そこにいたのは、どこかで見たような顔をしている大きな竜と戦っている、なのはのよく知る友達だった。

「う、嘘、レンヤ、くん？」

「あ、あの子は一体……
なのはの知り合いなの？」

ユーノが驚きながらなのはに聞く。

「う、うん、赤いオーラ？　みたいなの出てるけど、レンヤくんだよ、私の大切なお友達」

なのはが答える。

ちなみに赤いオーラというのは界王拳を発動したら出るアレである。

『くらえ！　完全に界王拳頼りの蹴り!!　8倍!!』

《ぬっ！？　グオオオオ！？》

煉夜の蹴りで竜が吹き飛んで行く。

それを見たなのは

「界……王拳……？」

今、界王拳って言った！？」

目を丸くしながら驚き

そして煉夜が右腹辺りに両手を持って行き、あのポーズを決めた時

「噓、あれって……」

『か、め、は、め……』

「……………」(ドキドキ)

かめはめ波を期待するのは。

『波っ！！　とでも思ったか！！』

だが煉夜は撃たずに竜の眼前へと飛ぶ。

「や、やっぱり、そうだよね……」

流石に撃てないか、とちよつとガツカリするのは。

《何！？》

『残像だ』

『波あああ！！』

「ざ、残像拳なの！？ かめはめ波なのー！？」

立て続けに驚愕するのは。

それにしても女の子なのに技をよく知っているものである。

「あ、あれは、魔法？

い、いや、魔力じゃない……

な、何だアレ？」

気です。

……と、言うようになのは結構前から見ていたのだった。

- - - - -

「つまり、カクカクシカジカシカクイムーブって訳なんだ」

俺はなのはさんにポルンガ（仮）が現れたいきさつを話した。

「え、えっと、それより何でドラゴンボールの技が使えるのか知りたいの」

それより！？ それよりつつたよ！？

ジュエルシードエ……

さて、どうしたものか……

「え、えっと、界王拳自体は生まれた頃から使えてたんだ、かめはめ波とかは、しゅ、修行？ そう修行」

修行らしい修行なんかせずに習得しちゃったけど。

「……………」

「な、なのはさん？」

え、だんまり？

こ、怖い、凄く怖い！

まさかOHANASIフラグ？

「す」

す？

「すごい！　すごいよ！」

え？

何が？

「界王拳やかめはめ波が使える何てすごいの！！」

そうか……

そうだね、全く知らない技とかならまだしも、この世界ドラゴンボール存在するもんな、かめはめ波とか使えたらある意味英雄みたいな感じかもしれない。

ていうか、目をキラキラさせてるのはさん可愛い。

「生まれた頃から使えるって……
レアスキル……なのかな……？」

足下で呟くユーノくん

そう言えばいたんだった。

身体能力やら何やらを耐えられる限り倍々に出来るレアスキルとか管理局に目つけられたりしないよな？

俺、界王拳を100倍まで上げる事が出来たらハンドレットパワーにするんだ。

「あ、そういえば」

なのはさんが思い出したようにいう

何でしょう？

「ニコポとナデポってなに？」

それか――！

や、ヤヴェ……

どう説明すれば……

「え、えと……

く、癖？ そう――！ 癖だよ――！」

「クセ？」

小首を傾げるなのはさん

「そう、癖だよ、困った癖でね、はっ！――！」

「？ いきなり後ろ向いてどうしたの？」

あつぶねえ――！

ノリで笑う所だった……！

セーフ！ ギリギリセーフ！！

「大丈夫だ、何でもない」

「そう？」

さて、うん。

どうしようかな。

第8話 瞬間移動かめはめ波って防ぎようなくね？（前書き）

この小説、日間ランキングで一位になりますター

初めて一位になったよ。

さて、今回はあんま進展ないです

如月くんが移動術覚えるくらい。

第8話 瞬間移動かめはめ波って防ぎようなくね？

ピッ

俺は額に人差し指と中指を当てる、悟空の瞬間移動ポーズだ。

「うーん、なのはさんの戦闘力は……3くらい？」

別に瞬間移動しようとした訳じゃなくて、ただ気を探ってみただけだったりする。

「ひ、低い……！」

ガンとショックを受けるなのはさん

「いやいや、なのはさん、悟空とかを基準に考えてるかもしれないけど、よく考えるんだ、ラディッツが初めて会った地球人のおっちゃんがいただろ？」

あの大人であるおっちゃんですえ戦闘力が5だったんだ、3も十分だと思うよ」

まあ、スカウターがないから、俺の勘だけだね

しかし赤ん坊の悟空の戦闘力が2ってことは赤ん坊にしちゃめっち

や強いって事だよな。

というか、何故俺がなのはさんの戦闘力を測っているのかと言うとあの能力バレした日から数日たち、俺となのはさんとユーノくんは一緒にジュエルシード集めをしているんだが……

ふと、なのはさんが「私の戦闘力って幾つくらいなんだろう」って呟いたため、こんな状況になっていたと。

「なのはさんは気よりも魔力の方がデカイし、魔導師戦で戦闘力はそんなに関係ないと思う」

「そっかー」

ていうか、結構前から思ってたが、この海鳴市って何か気がデカイ奴何人かいるんだが

その内二人がなのはさんの家にいるんだよな

完璧にあの人達だよな。

今思ったが、フェイトさんの気を探ればどこにいるかわかるよね

「レンヤくん、レンヤくん」

「ん?」

なのはさんが何か期待したような眼差しで俺を見る。

え、なに？

「瞬間移動はできないの？」

……………くっ！

ごめんよ、なのはさん……
流石に瞬間移動は……

しかし、わくわくした表情をしているなのはさんを見ると、出来るんじゃないかって力が湧いてくるね。

「ちょ、ちょっと待ってて」

「あ、うん」

俺はなのはさんからは見えない位置まで移動する。

「さて……………」

再び額に指を当て、なのはさんの気を特定する。

別に額に指を当てなくても気は探れるんだが、何か格好いいし。

「瞬間移動、瞬間移動……」

俺は今なのはさんの喜ぶ顔がみたいがために瞬間移動を覚えようとして……

なんだろう、なんか複雑な気持ち。

まあいいや、集中集中……

正直どうやるか分からないけど……

頼むぞ、俺のチートボディ！

むむむむ……！

なのはさんの気と俺の気を合わせるかのように……

なのはさんの気を手繰り寄せるかのように……！！

跳べ！

跳べよおおおお！！

ピシュン！！

「え？ わっ！！ レンヤくん！？」

「……………出来た？」

なんか、某鳳凰院みたいなテンションになったら出来た。

「もしかして、今のが瞬間移動！？
すごいー！！」

「て、転移？」

なのはさんがはしゃぎ、ユーノくんが驚く。

ユーノくんいたんだね

「なのはさんのためにたった今瞬間移動を覚えたよ」

流石チートボディ。

度々言ってるけど、悟空、本当にごめん。

「え？ 私の、ため？」

「い、いや、何でもない」

「そ、そう」

なのはさんの顔がちよつと赤い。

ヤバい、何か主人公みたいな事してしまった……！

しかし、コレで瞬間移動かめはめ波が出来るようになったのかな。

ヤバいな、どんどん魔力の必要性がなくなっていく。

てか魔力より気の方が効率いいんじゃないかと思えてきた。

第9話　ぶ、ブルータス！　ブルータスじゃないか！（前書き）

アンケート的な何かを取りたいと思います。

感想で魔力SSSもいらないうて意見があつたので。

？魔力をSSSじゃなく、DかCくらいに落として、新たなチートがなすりつけられる。

？そのままでもいい。

よろしくお願いします

第9話　ぶ、ブルータス！　ブルータスじゃないか！

皆さん、どうも、如月です。

今日はすずかさんの家に招待されたので来ています。

しかし、アレだ。

ハッキリ言って、女の子3人の中に男である俺がいる時点で結構まずいのに、女の子の家に行く勇氣なんぞ持ち合わせておりません。

なのに来ている理由は

止まっていました。

何がって？

リムジン。

俺の家の前に。

わけがわからないよ、と疑問に思っていると、中からアリサさんが現れ

「あんたの事だからまた妙な理由つけて来そうにないから迎えに来てあげたわ！」

って、胸張って言われてしまい、断れなかった。

そういう訳で月村邸にお邪魔させて貰った訳だが

「どういう事なの」

「「「ニヤーニヤー！」」「」

何かまとわり付かれてるんだが……

「これはまあ、なんというか……」

「うちのネコ達みんな……」

「レンヤくんにつっ付いてるの」

何故？

にこりとしてもてなければ撫でてもないぞ!?

まさか、俺は実は猫に好かれ安いのだろうか……

まあ、すずかさんの家の猫が人になれてるってのもあるんだろうが……

「そんなに懷かれてるんだから、撫でてあげなさいよ」

懷かれてるってかじゃれつかれてるって感じもしないでもない。

しかし

「俺が撫でたらすすかさんちの猫はみんな俺の虜になってしまっぞ」
「？」

「何言ってるのよバカ」

ひどい！

「最近、煉夜くん、よく冗談を言うようになったよね」

すずかさんが言う。

実は冗談じゃないんですよ……

さて、どうしたものか

と、考えた瞬間

「フニヤアアア!!」

「「ニヤツ!?!」」

一匹猫が飛び込んで来て、俺にまとわりついていた猫を追っ払う。

こ、この猫は!?!

「あれ? この子うちのネコじゃないよ?」

「どこから紛れ込んできたのかしら?」

「ブルータス(猫)! ブルータスじゃないか!」

「「え?」」

何故こんな所に……

「ニヤーン♪」

俺に飛び付いてくるブルータス

「お前、何でここにいるんだ？」

「ニヤンニヤン、ニヤニヤン、ニヤーン!!」

「暇だったから追い掛けて来た？」

家からここまで結構距離あるのによく来れたな」

「ニヤン！」

「か、会話してる」

なのはさん達が驚いているが別に会話してる訳ではない。

ただそれっぽい事を言ってるんじゃない？っていう俺の勝手な解釈である。

でもブルータスを見るとあながち間違いではないような気がする。

.....

さて

「正直、俺はここにはいけないような気がしてならないんだが」

俺にはガールズトークなんてぶっ潰してやろうぜ!! みたいな勇氣はないよ。

「気にすんな」

「アリサさん……」

そんな男前な事を……」

そんなキャラだったわけ？

でもまあ、紅茶は美味しいし、お菓子も美味しいし、悪くはないよね。

猫撫でたいのに撫でれないのが残念だが

そんな感じで、三人の話聞いて、時折相槌をうったりしてのほほんと過ごしていた。

が。

「!？」

なのはさんが驚いたように目を大きく開く。

《なのは!》

《うん、すぐ近くだ》

ユーノくんとなのはさんが念話で話します。

そうだったな、ジュエルシードが近くにあるんだっけ。

《どうする？》

ユーノくんがなのはさんに問う。

《え、と……

えーと……！》

なのはさんはアリサさんとすずかさんを見て悩む。

《そうだ！！》

「ユーノくん？」

ユーノくんがなのはさんの膝から飛び下り駆けていく。

「あらら？ ユーノどうかしたの？」

「うん、何か見つけたのかも、ちょっと探してくるね」

「一緒に行こうか？」

すずかさんが聞くが

「大丈夫、すぐ戻ってくるから待っててね」

なのはさんはそういつて走って行く。

《なのはさん、二人は俺に任せて》

《！！ う、うん、ありがとう！

念話出来たんだね》

散々念話を聞いてたからなんか感覚的に出来たよ。

「ユーノくんはなのはさんに任せて、俺達はドラゴンボール談議で
もしか」

「なんでよ」

「あはは、ごめんね、私よく知らないんだ」

「それはいけない、今度全42巻を貸そうか？」

「やめい！」

アリサさんに止められました。

さて、そういえばなのはさんとフェイトさんが初めて遭遇するんだ
ったっけ？

なのはさんとフェイトさんの戦いには下手に首突っ込まないほうが
いいだろうな。

アルフさんとは戦っけどね。

第10話 湯煙温泉……ポロリもあ「ねーよ（前書き）

アンケート結果。

？になりましたー

（ー）

第10話 湯煙温泉……ポロリもあーねーよ

あの後、なのはさんはフェイトさんと無事遭遇したみたい。

アリサさん達と話をしながら気を探ってて遭遇したのは分かったけど、アルフさんの気がなかったなあ……

原作もこの時アルフさんいなかったんだっけ？

正直9年も原作を見ていないと、殆ど忘れてしまっただが。

転生系の二次創作ってオリ主はずっと原作覚えてたりするけど、凄い記憶力だ。

もしかすると、記憶チートなのかもしれない。

まあ、それはそうと、しばらくして、フェイトさんの気が離れて行き、なのはさんの気が少し弱々しくなったため、アリサさんとすずかさんにはなんやかんや言って、迎えに言ってみると、地面に倒れているなのはさんを発見。

急いで連れて帰りました。

そして、その日からなのはさんはフェイトさんの事で悩みだした。

.....
と、言う訳で、温泉に来ました。

なのはさんに誘われたんですね

「お父さんとお兄ちゃんが是非おいでって」

.....さて、界王拳の限界を超えようかな。

20倍かなあ、いや、30倍.....

だがしかし、現実逃避しても意味がなかった。

「こうなれば後は野となれ山となれ」

まずはみんな温泉に入るようだ。

女子率高いよな、本当。

《レンヤ！ 助けてー！》

ん？ ユーノくんから念話が来た。

ユーノくんの方を見ると、女湯に連れて行かれてました。

……うらやましい。

だが、助けを求めているならば答えようか。

「なのはさん」

「ん？ なーに？」

「ユーノくんプリーズ」
手のひらを差し出し言う。

「ダメよ、ユーノは私達と入るのよ！」

アリサさんに遮られました。

「ユーノくんは男だぞ？ ここは俺達と男湯だろう？」

「ユーノは動物じゃない」

「ですよー」

《ええ！？》

ごめん、ユ一ノくん。

強く生きて。

《レンヤ！？ レンヤああああ……！》

連れてくれました。

「さて、煉夜くん
俺達も入るか」

ポンと俺の肩に手を置き言つ、土郎さん

そして、その後ろには恭也さん。

詰んだ。

- - - - -

カポーン。

ふう、いい湯だ。

さて、上がるか。

「どこに行くんだい？ 煉夜くん、しっかり温まらないと」

ダメでした。

引き止められたので、再び湯船につかる。

「さて、煉夜くん、ちょっと聞きたい事があるんだけどね？」

士郎さんが言う。

「最近、なのはが……」
ガクブル

「キミの事をよく話すようになったんだが、どうしてかな？」

！？

ば、バカな……！

士郎さんの気が膨れ上がった、だと？

「それに、最近キミとなのはは一緒にいる事が多いが……
何をしているんだ？」

！！？

そんなバカな……

恭也さんの気も膨れ上がった……

二人の気がどんどん上がっていく……！

お、俺の界王拳10倍でも勝てるかどうか……

「あ、ああ……」

気分はベジータ

も、もうダメだ、おしましだぁ……

ブクブクブクブク……

「ん？　れ、煉夜くん？」

「た、大変だ、のぼせて気を失ってる！」

ベジータの気持ちがよく分かりました。

第11話 寝過ごしはダメだね（前書き）

さあて、壁にぶち当たったぞ……

英語のテストが10点未満を貫いて卒業した私にデバイスの台詞は難しすぎるぜ……！

まあ、普通に会話する分には日本語でいいよね。
ちなみにピシユンと言う効果音は瞬間移動した音ですのよろしく。

第11話 寝過ごしはダメだよ

.....ん？

あれ、ここは.....

.....ああ、そうか！

高町親子の戦闘力にあてられて気を失ったんだった

ハハッ、すげえ真っ暗

.....もう、夜じゃん。

温泉の思い出が恐怖で震えた事ってどういう事だよ。
そして、どうして俺は気絶から睡眠に移行してたんだよ！

確かここにもジュエルシードあったよな？
そして、フェイトさんも来るんだよね？

完全に寝過ごしてる気がしないでもないが.....
ちょ、ちよつとなのはさんの気を探ってみよう

………ん？

旅館の外にいるな、しかもフェイトさんの気もある。

もしかして、バトル中？

ちよつと行ってみるか。

ピシュン！

- - - - -

場面が変わり、なのはVSフェイト。

月をバックに二人の魔法少女が戦っている。

《Thunder Smasher》

フェイトのバルディッシュから遠距離砲撃魔法が放たれる。

《Divine Buster》

それに応じ、なのはのレイジングハートからなのはの主砲、ダイバインバスターが放たれる。

二つの砲撃がぶつかり合い、拮抗する。

「レイジングハート、お願い！」

《all right》

レイジングハートはなのはの言葉に応え、デイベインバスターの出力を増加させる。

その結果、なのはのデイベインバスターがフェイトのサンダースマッシャーにうち勝った。

「！」

「なのは……強い！」

ユーノが感嘆する。

「でも、甘いね」

そんなユーノにアルフが言う。

《Scythe Slash》

「なのは！！」

ユーノが叫ぶ。

「！？」

なのはが上を見上げると、バルディッシュをサイズフォームにしたフェイトが接近していた。

- - - - -
ピシュン！

瞬間移動でやって来ると、上空でフェイトさんがなのはさんの首もとにサイズフォームのバルディッシュを突きつけた状態で止まっていた。

も、もう決着ついてるな……

これは正直、下手に動けない。

「レンヤ！」

背後からユーノくんの声。

「ユーノくん、すまない、大分遅れたようだ」

「ちっ、新手……ってあんたはあの時のボウズ……！」

アルフさんが驚いている。

神龍騒動ですね。

「！ レイジングハート！ 何を……！？」

なのはさんの方を見るとレイジングハートがジュエルシールドをフェイトさんに差し出している所だった。

「主人思いのいい子だね」

フェイトさんはそう言い、ジュエルシールドを手に入れ、地上に降りて来る。

「帰ろう、アルフ」

「さすがアタシのご主人様♪
じゃあね、おチビちゃん！」

アルフさんが狼から人に変わり、フェイトさんと歩いて行く。

「待つて！」

だが、なのはさんが歩き去っていくフェイトさんを止める。

「名前……」

あなたの名前は？」

「フェイト……フェイト・テストロッサ」

フェイトさんはなのはさんの問いに答え

「私は……！」

なのはさんの言葉を最後まで聞かず、飛び去って行った。

「……………」

なのはさんはフェイトさんが去って行った方を静かに見つめていた。

「なのはさん、フェイトさんとはきつとまた近い内に会うことになる。」

元気だして「

「……………うん、ありがとう、レンヤくん」

さて、もし士郎さん達がなのはさんがいないのに気付いたら俺がわりとマジでヤバいので、そろそろ帰ろうか。

「旅館に帰ろう。」

瞬間移動するから俺に掴まって「

「……………うん」

- - - - -

【以下、オマケと言うかボツ】

月をバックに二人の魔法少女が戦っている。

《Thunder Smasher》

フェイトのバルディッシュから遠距離砲撃魔法が放たれる。

《Divine Buster》

それに応じ、なのはのレイジングハートからなのはの主砲、デイバインバスターが放たれる。

二つの砲撃がぶつかり合う、と思った瞬間。

ピシュン！

サンダースマッシャーとデイバインバスターの射線上に煉夜が現れた。

「え？」

「！？」

「ええええ！？」

上から煉夜、フェイト、なのは。

チュドーン！！

「うばああああ！！！」

「レンヤクーーーーん！？」

ちょっとふざけ過ぎたのでボツりました。

第12話 豆……？

「ニヤーニヤー」

ガリガリガリガリ

朝、ブルータスの鳴き声と何か削ってる音で目が覚めると。

枕元に……

「何だこれ」

何かあった。

「箱……？ ブルータス、何これ？」

「ニヤー？」

さあ？ って感じに首を傾げる、ブルータス。

ふむん、えーとなになに？

箱を手に取り、箱に書かれた文字を読む。

「×豆作りセット？」

って書いているが……

何豆が分からん、豆の前に何か漢字があるんだが、ブルータスの爪痕で削れて読めねえ。

一体誰が置いたんだ？

誕生日って訳でもないし、両親からのプレゼントとかならクリスマス以外は直接渡してくるだろ？

取りあえず箱を開けてみると。

「種と、何か少し青みがかった液体」

セットって言うからいっぱい入ってんのかと思ったら二つだけって。

よし、ちょっと、植えてみようか。

- - - - -

だがしかし、今日は学校だった。

学校から帰ってにしようか……

しかし、気になるんだが。

聞いてみるか……

「母さん」

「あら？ レンくん、どうしたの？」

初登場、俺の母親（26歳）。

ちなみに父親はもう仕事に行ってる。

「今日学校休んでもいいかな」

「どうして？ 具合悪い？」

「気になる事を追いつめる年頃だからさ」

何言ってるんだ、俺。

「……………」

母さんがジッと俺を見つめる。

やっぱダメ？

「そう、そっか……」

レンくんももうそんな年頃か……

うん、いいよ、学校にはお母さんが電話しとくね」

何か、成長した息子を見て、嬉しいような、どこか寂しいような、そんな表情をして言う母さん。

何かノリいいな。

「え、てかズル休み、承認？」

「うん、でも今日だけだからね」

ニコニコしながら言う母さん。

相変わらずのほほんとしてる人だな。

まあ、うん。

じゃ、ちよつと庭に行つて種を植えてみるかな。

- - - - -

とりあえず庭の隅の方に植えてみるかな。

「へへ、この土ならいい豆が育つぜ」

プスつと土に穴を開けて……

種を入れて、埋めて、謎の液体を垂らしてみる。
ポチャ、ポチャつと。

……………。

ニヨキ

！？

もう芽が出た！！

ニヨキニヨキニヨキニヨキ……

凄い勢いで成長してる……

ふむ、莢豌豆みたいなのが出来たぞ。

とりあえず収穫。

莢に入ってる豆を一粒取り出してみる。
何か、既に完成した大豆っぽい豆が出て来た。

……これって、まさか……？

いや、そんな馬鹿な。

……ちょっと、食べてみるか。

パクツと。

ドクン！！

「！？ うっ……」

な、何だ、力が湧いてくる……？

こ、これはやっぱり……

さ、さっきの箱！

箱を調べてみよう！

部屋に戻り、種と液体の入っていた箱を調べると。

「ん？ 手紙？」

手に取り読んで見ると……

【久し振りじゃな、元気にしてるかの？

最近、最高神（笑）と言われて軽くへこんでる最高神じゃよ。

いやあ、数年振りにお主の事を天界から覗いてみたんじゃが、ワシが与えた能力のせいで苦労してるようじゃの。

そのお詫びと言ってはなんじゃが、お主に特製仙豆セットをやるっ。

まあ、お主に与えた能力があれば、仙豆なんぞ別に必要ないんじやが、持っておいて損はないじやろ。

それでは、コレからも頑張ってくれ】

じいさん……

こんなんよりニコポとナデポをどうにかしてくれよ！！

今でも十分チートなのに、仙豆って……

回復チートも追加された！！

数に限りがあるチートではあるが……

ううん……

……あ、仙豆でいい事を思いついたぞ。

俺の思惑通りになるかは分かんが……

やってみる価値はあるな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0830y/>

テンプレチートオリ主に強制的にさせられた元一般人のお話

2011年11月5日17時33分発行